句[illegible]の文 二十七

句を名とせり

へ12
利
20
37

へ12
20
34

乙号特
門 へ
號 20
巻 34

ひとりうちなげきて涙ぐみ
べきかへそうのれすることの
なりねのくらうをうけ給はんいとうけ給へ
ひとりの二の家それなりとて
家の若君
れをとりあてげつくるべてちるあれありと
ちめれどいとまばゆくいと
くそれつるのひとざまにてあてこちる
しくなりすることまことにてそれちるひとり
人のさひとしてちるを指もいとうへの御
ひとりけるひとりもやうとうのへる

きんうえへかうよりあるうのいろうろうりけうぶぶのうえの
れいしんをうるるる

とばかりそなれてまゐりたまひけるいと
いとうしろめたき事なり六の君ちかのそのころすこし
はれまくさのぼりまゐるみこ遊ばしの御心つくさせ
たまひしまゝに法花院なれまゐりて後さ殿
ぜ殿ひめぎみ〳〵ゐたまひぬるひしの
なりすべきすまうどもいとの東の院をでゐたまふの事
よ京ちう里と思ひ〳〵ふたの君はいと東のやう
まゐりたまひけるに今上
なりしもすいまのさまれしもしたまふのこゝろひ給
へば院のうちにくゝずくちまりまけるを
右のゆとゝびとれうへゝいとへのるめりをこ

そくまもいけう限の世を心をとゞめて行ふあ
ゝ人の家ぬの名ぬちまくおけれて世れたるひ
もつたくゝゆいとを哀なもられさまをを
紙ようあんうぶりぶよこの院あゝぶはりの
ぬぬちまぶひとうけれまうぶうと思ひの給
もまて〳〵ゆとれ一条の家をわゝ
なまをあてちん三条どれと哀ぶる十四日げく
うつゝうゝひすゝ給ける二条院とて行ふり
とげゝ六条院の妻のあとゝぶて世をのゝりし
五の妻もゝぶひとうのれすゝのあなりうと
まて〳〵のれうゝあまるのゝやうちまれ

うちうちそつてあうひまをうかがひいとれハ
いづくのれこと紙も青のれ紙もそのまくてう
わくあうけうこうるくおまひさやぶりつう
まうりのつよも蓋のうへのうやうにてどうを
ものくまうまうばいづくうちうをつくてけう
まうりうしなくまうまうつうはいくうまうりつくて
紙心うをくこうりのべうてこのひう
こう紙うちのくあうずうるうう出こうこ結
あのれうるの人院をうひうこうれうくうよくう
つけてもせうくうぐ出をけうちうやうう行ずも
こへうさうげうをうりうりうりまうて後の

うちの人ぐれくくやうちうどはうこうを
ううくず限ううれうれをがううれうてまうれ
ひくこれのこのれうれ結を心こうのうこの前のうくう
つけてせ出れ結うれけれまうれ前の前の盤も
げううぐううりうもうこうまうう拙こうん二月出
こやの月武い院のうこうつけのこうくまう
ひ泉院のくうぐうりうてうばくくづうきさい
のこもみうくうちうぐなつうず心ばううばうう
うわくくれうこうこうのやうこれこうこう
のこうれ院明うども院こうてうこせ結十院うて
二月こ結院こうり結秋右を中月こ吸てれうう

むりのわ階ちかどをうへぐうれうえちかさよう。
いそぐうへうへなとちかびさを結おりますおもぐ
ちうさ墓をざうしまちひちかぐうへうれ
らんじいれて。ワうさへもちいさをづへまで。
きぐれうをそうらのへかのれうをうもも。
まぐゆくうのへさせのへりよりもうやうもうよ
らふあ房の中ふもくうらうくあてやうまめや
すきいうれうつーワうさせ結つ。院のうちを四ふ
つけて。ずうくありうもめべくとのうをわぐく
ぐーうれあつうひづうりばれうまへとお
被仕のおりはいとのーあれとううしれ服りあ家

うぐ一家かりーけうをちんぐうりちくうーづう結
れありう海よをうぐずうきいの家のれあばくの羊
角ようまうり結けうひようそうちるどううしも
とううまでちん冊うやいいうぐれをうるひを
をづうーうのて。月ぐーれ金仏ぐーりある
びのれ八條おりくのううれいとうをうう計
をーのて。ぐれぐーまおうーませば山羊の出入結紙。
へうていおやのやうよれもうをげーおばし
ればいと表ーて。院ーもうちるものーまつうし。
長家もつぐくのうやうちもおつーれ遊びい
ぐうううてどもちひめへばうまちくうーて。

つぐ身をかてゝ紙にかけるおきなの心ちして
柏ノ窟ノ
けの字のひしゝとしたゝりくいぶゝうばつ
るくやけるれぐゝそめべき人もあるゝ
とれ色ゝてもさりくとばされんゝ
つきすぐるれべゝとも心ようけてゝいるり
けゝとゝるれちぐりゝてゝうやすゝめゝ
ゝひゝうゝ分ゝゝも吹くんぜんげゝゝつの紙カ
ゝひくんゝきりゝもゝえゝゝゝれとぞゝひゝるゝご
れ始けゝ
笠
ばつゝゝ濯ゝるゝたゝまゝゝゝうゝゝてゝちゝめゝも
ゝゝもゝゝゝゝ紙分ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝれて紙分ゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ紙にこれこれ四ちとゝすけておるべうい
後の世紙ごとゝそふこれずざ治りけんとやも
くれやうむすばれてやちどそーちうーふ紙
ゝてもゝめんをうはちゝ心つゝて元服い拍う
ゝり治れどずまひゝてず之れづゝ世中ゝまて
ゝまれてまだやゝまでゝゝるやゝるれ力のゝぐり
もゝゝろゝうゝずのゝゝゝもゝげまりゝゝうゝゝも
ゝゝ文のれゝゝゝ後のれゝゝろゝせゝくてゝゝと表
ゝゝまれゝ拍ばれゝゝゝいのゝやゝゝゝまゝゝう
ひゝゝゝゝゝてゝゝやゝゝちまゝゝゝまゝゝおひゝゝで
ゝゝびゝ治ゝゝれゝゝてゝゝゝゝくゝゝゝゝゝ治ゝゝぐ

ゝゝ来ゝゝ生れゝゝゝひゝて心ゝゝゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝえ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ光の治ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ治
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれこゝゝの光ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けうあるとどうしてはなぞうげうりげなくて
べしべしのどけさは心をとゝめてありしがこの
春はいまぐしてさよ世れそしひとすぎてゆあり
うゝとゝるくちぐぞ地しはげうゝべくて
いとせの人とけいうゆざりけうるゝやど
わうゝともゝあうゝゝひうゝへうかうゝちも
そこけうゝいづこゝるんをゞれうゝあれゝうゝと
こゆう面もうゝさがゝぐいとうる面めしうもづし
けよ心のおくはうりげうるけうゝひ人にうゝあうり
うり香うゝぐしゝさそ山せれ旬ひうゝず あやうゝさ
まぐうゝけうゝまひうゝへうけうゝとく帰つゞうゝ程の

とび風もまゝとゝ百姫のかもありあべさ心ちし
けうゝられもゝばうりよ姫められる程のいとやうれで
ゝぐゝありうゝやいあうべゝさ面ぐゝうれひとゝま
ゝんとづくうひ男ゝさすべうゝとくゝゝうゝとうゝま
でうち恵び立うゝんも地の面もうゝゝはのあゝさ
のゝうれあうゝまぐゝさゝうゝゝうゝさぐりて おゝくゝうゝもつけ
給けひどあうゝゝのれうゝゝひつゝようづあれうゝうゝのゝど
もゝこの春のいつうゝしもうゝゝ旬ひとうゝへおゝま人ゝ春
春のまもうゝれくゝゝでけ結梅の香いぶ雪面の春ゝう
もあれかうゝむう人へ知ひく秋の空ゝあゝまゝおゝさゝあぢ
むう面ゝまゝとのゝゆりうゝうれてゝうゝうゝゝさ地風ゝて

ちよおりるーうくるんまきりけうくあやちさま
で八のうぐむちうちさのえうを芳つて文うんこしく
うりもぶぐまーくさーてぐれいひぐとくろげのき
ぶれうちうーとちあ絵好のとひぐぐ。あそせい
とちまこ。ちまえ人の前戒まも。黄い梅の園をちぐめ絵。
秋いうれ人のゆつう如良芳ぐとーれつよるすあう
萩の夢うも。ちうく出心うつーを絵ず花をうすく
きくよ。ちうへゆくーみぐちう風。れげるきうれも
うーるどいいとすうまーぐき彩ぐれのけはへまで。
ぐーすてずるどいひぐとめうてうよみづうをちんう
うてくこのまーくちうけう

ひ[illegible]ほどり[illegible]ずく[illegible]ちるとびやつ[illegible]ぎすぎて
すくすくすくすくひろ[illegible]れくまへうと世人もた
くさくさう音の源氏もすべてくくくそそ
のくくやうぐうもくくそのへくくくそぞちうし
く源中れ仏文こ[illegible]つるまうつて遊びわるぐるも
くくうくまくひをかくくそげつぐまくくも
ゐくどうくくくのけべき人のこ海ほもん例の
世人いこほかを芸こ[illegible]ほうゆれとくくくくいひ
づくて[illegible]れけうくくもくくいひ
ゐぐいくうくくさめくさこくくくてぐちゐぐ治も
あれば文いこ海ぐこゆくくうもくめぐくつくう

をべの絵うくて人のれけくひゐる絵くも部色くう治
けぐくれ心ほつけておげぼくくくいくくうちう
くう源氏の女一宮ぐ人聚ぐくやうまくくもくくぐや
ひくちくくくくと芸くくくは女おれもけくくも
くくくくくくくくあくくくあくくくくくくく

ぐてきさやゆんちぐ　ちもつぐ　つ　さん
あくんあくうくうぐ　くくんいい　くくちぐく
すて法さあくうて心　ゆくもべくくのるくぬぐ
くくぐくやありけん人のゆくくちくんく
ちぐいいくくてふくうべくくもあくず十九ノ法ノ如法くく
三位の宰相くくて代中ねくくれ法ず冷ごろぐ秋の
けくくちくくくくくくてくくくうちくくでくく
人のちぐくくくくくく

心もつづけられ人よりあしうべくこころくふた
つて祖母はうともちりけるワガ母人ゴ
りでくれんと吹のへうまを結られいだされくちげの
玄策とちゝ結あうりもこうるくまてこうるく
うろうくおびこやもちるほどをれづるに
ざりのうひ所もあるこゴるを人へのこゝとと
こゝくちるどまてちるこゝばどうくまぐるうそ
こうるくちるけるこゝめ程のゆくゝ心やまゝこに
ゝうれうへいびかされつて三条の女ゴ寄りあう
まうハあるゝありつれ若ノ殿ゴうも。うゝげちう
ワざちるあれど。こえちんうりいとこうるばそこよふ

まびて若あるまでこうきれ人ぐのむうちるさ
ぢうまうれこえこうけうるはうりさすぐりいと
ちるゝうゝ。ぶある人ノ若のれを結られいうる人これ
心ゝうゝゝゝやうこうすぐさう。女三若人のおりう
ちうん世の限ハ結タまれめどれずちうんぎゝれみ
なんをぐゝとゝひのの人べ君のおタくもうのまう
まれゝ結れむすめうちをびううぐもと心ざゝ
結ちぐゝえうゝ。ひで結ゝぐ。こすぐゝゆゝゝげ
ちるちるゝひちるをとハこちひちるをぐゝこの若白ちどべ君ぐうに
をこうて。ばうゝるけちるずゝひちうべうさ人のまとめうゝ
べきうけとこゝゝワづゝふやんゝとちるさうりも。

内裏侍のすけどもの六のあとにいとすぐれてかし
げ心ばせあるべきものとおぼしたる中に、また、その
おとゝめざまなるべきさまにもくわしくこまかに心
づかうそうして、一条院のさうあるひとびとものへ
られでさぶらふとて、なりまさりて、
つねにいたりてけぢかくせそめていたるしぶ心
とくの給てんべへのおりさまをもこゝろへいとと
そあるべきれちぶ心そうして、いとうしろ
めたくこゝろぶつかあるべきやうにおもひ給へ
このことをもて、人の心はけんとりおもくいとり
ある人給のゆゑれくらあるべきのまうけ六条院

まで、いとかぶとよきあて、こゝをもおりまさせん
のうろづひしあるりそれ日こゝろもとあるり
おつすぶこれきうひ給ふきいだしのもいづれ
ともちくげくこゝろげおかつまず中ともこの
白
若々の衣へげいとすぐれてこゝろうこゝをふ
全ヒノ
宮のこゝひとちの衣とゆう衣だしのもふ
ちるやげこゝひこゝちをうりあるべう所のたの
あるがちようちめ何ういとくこゝもそうあ
まで給若々衣ひこちの衣給ぶしのあのうやと
白
ひとうう所ようのさのせなりてまでは宰相
中納言げ方まで、どとちくまでは給ようけうをえこ

遣はしまゐらせたりし事ありしまゝにやとぞ
きこえし（此）よの（三人をタヾ）事（遣）は（中）納言（殿）大弁（殿）ばかり
と（遣）はあるべき（これ）也（皮）よのまぎれいざ（タヾ）ちひさく
六条院へおはしまのやうに（行）なるべきなりて
えんちやうそれば（や）（事）なれば（ま）ばかりこそ行（ま）まさ
そあるべてつり（治）をばこうを（垂）ていかるん
仏のれ（こ）おまはしやうのおりかたの心やうにて
まさのんとこそうちえん（質）の南のひさしにつるの
ぶく南むきに中かねつさうおむさまむくて
えんだにこそうちとぢのれ（こ）（屋）ありけれつけ
ちぶさうにまりてあれ面白くなりけるまくめこ蘇

てぶそれ（柚）のうちに人すこ風ふれ（前）ちこさ梅花
いとこいこはこうびこぶれこう白ひのぶこけり
つこれこう（笛）例の中ねのれ（笛）ありのいこぶくまて
まやされていひこぶ（ち）ぶ面めこうこのぞく
水房ちどもやこはあやちく心（涙）ちさ行ちれど（ば）
こそげよはこうれちれこめであへりおとぶ
ものでこうとこそこうちこちこうつもつちりまこり
てこぶれめこ面こおこあこうそこて（行）（右）のすけ（笛）も声
こうへへやいこうこうとぶぶこやとの（結）
へべ（笛）ぶこうめはどよ（琴）のまちぶ